The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	易傳の道徳思想
Author(s)	竹内, 義雄
Citation	懐徳. 1930, 8, p. 13-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88826
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書籍を六部に分けたのが、後世になつて四部に分けられるやうになつたのは自然の勢で、これは己むを得ないといふことを十分に認めつゝ、分類が如何にすべきものかといふことが、根本から研究して居るのである。これ等も今日の目錄學に取つても非常に有益なものである。

大體章學誠の學問は以上述べたやうに、今日から考へれば、史學を單に事實を記錄する學問とせずに、其の根本として原理原則から考へやうとしたのである。其の考へ方は哲學的であるが、併し此の人の考へとしては、あらゆる學問は哲學が根本ではなしに、史學が根本である。あらゆる學問は史學其のものである、史學の背景のないものは學問にならぬといふ意味で、總ての著述を批判しやうとしたのが特別な點である。

これ等の考へは文史通義を通讀して、精細に其の組立ての仕方を考へると判るのであるが、粗雜に讀み去つたのでは、これだけの精密の組立ては判り難いのであるから、支那のこれを崇拜する學者達でも、なか〳〵此の人の眞意を得ることはむつかしいのであつて、漸く最近に至つて幾らか西洋の學問をした人達によつて其の眞價が認められるやうになり來つたのである。

で史學のみならず學問の見方から言つて、此の人の學風といふものは今に於て生命があるものと考へられるので、兎も角これを今日の學界に紹介して置きたいといふのが、自分の本志である。

易傳の道德思想

文學博士　武內義雄

私の演題は「易傳の道德思想」として置きましたが、併し私は特に易に對して深い研究をして居るもので

はありません。丁度此の講演に來るやうにとお話がありました當時、山片蟠桃の「夢の代」といふ書物を讀んで居りますと、其の中に易に關する記事がありまして、其の記事が大變卓見であると考へましたので、それを土臺に少し蛇足を畫いて暫くの間御淸聽を穢したいと思ふのであります。

御存知の通り山片蟠桃は當大阪山片屋丁稚から仕上げて非常にえらくなつた人でありまして、漢學の方では中井竹山先生、履軒先生の敎を受けた人であります。從つて其の經學に關する說は懷德堂の經義といつてもよいのであります。此の山片蟠桃が、仙臺の財政整理を行つたといふことが、海保靑陵といふ人の經濟談に出で居りますが、丁度仙臺の宮城縣立圖書館に、「共和一致大作辯」といふ薄い寫本がありまして、其の寫本は當時仙臺の財務に關係して居た人に、蟠桃が與へた所の財政整理案の一つであるやうであります、それから仙臺の近郊に塩竈神社といふ立派なお社がありまして、其のお社に山片蟠桃が、主人山片屋の名前を以て寄附した大きな石燈籠が一對のこつて居ります、是等ののこつて居るものだとか、或は記錄なんかから考へますと、蟠桃は仙臺にも可なり深い緣故のある人でありまして、私が丁度仙臺から出まして、此の壇上に於て蟠桃の易說を基礎にして、お話申上げるといふことにも、何か不思議の緣があるやうな氣が致します。彼や是やで私は「易傳の道德思想」といふ表題を揭げた次第であります。決して私が特に易に對して深き研究を遂げて居る譯でないといふことを、豫めお含みおき願ひます。

さて先づ話の順序と致しまして、蟠桃の易に關する考を申し述べなければなりませぬが、それに先立つて易そのものについて——それは皆樣既に御存知のことゝ思ひますけれども——念のため極く概畧を申しあげます。

易は上下の經とそれに對する十翼とから成つて居りまして、經といふのが本文であり十翼といふのはその

解釋に當ります。更に詳しく申しますると易の本文は凡て六十四卦から成り立つて居て、卦毎にその說明がついて居ます、各卦の說明は又彖辭といふ部分と爻辭或は象辭といふ部分とに分れて居ますが、この六十四卦の彖辭と象辭とが易の經文で、その經文が上下二卷に分れて居ますからこれを易の上下の經と申します。さうしてこの經文の彖辭を解釋　たものに彖傳があり、象辭を解釋したものに象傳があり、又特に乾坤の二卦の彖象辭を解釋したものに文言といふがあり、それから各卦の辭には關係せずに易全體の概論とか說明とかいつた樣なものに繫辭、說卦、序卦、雜卦といふものがあります、さうしてこの彖傳、象傳及び繫辭の三は各上下篇に分れて居つて都合六篇ありますから、之れに文言、說卦、序卦、雜卦各一篇を加へますと合計十篇になります、この十篇の解釋を易の十翼と申します。この十翼は一般に彖傳、象傳、繫辭傳等といふ風に、傳の字をつけて呼びますから、又これを易傳とも申します。そこで易傳の道德思想といふことは語を換へて申しますると易の十翼の道德思想といふことになります。

さて蟠桃はこの十翼の性質について非常に水際を立てゝはつきりと說明して居ります。この十翼に對する古來の說明は甚だ混雜して居て本當の意味が判然しませぬが、蟠桃の「夢の代」に說明された所は非常にはつきりして居ります、極く簡單な文章でありますから、必要な部分を朗讀させて戴きます。

易ハ伏義ノ畫スル所ニテ、未タ諸翼ノ辭ナキ前ニ卦爻ノ象ヲミテ吉凶ヲ決セシコトニテ、卦爻ノ象バカリニテ實ニ無量ノ味アルモノナリ。ソノ後文王彖ヲカケテ周公又爻ノ辭ヲカクルナリ。大象傳ヲ作ル人ハ誰ナルカヲ知ラザレドモ、スグレタル文ニテ、孔子ヨリ前ノ書ナリ。古ハヒトヘニ象ト云。小象傳コレニ次グ。ソノ餘ノ傳ミナ疑フベシ。……繫辭傳ハ博ク易論ヲ設ケテ云ツクスト雖モ、乾坤二卦ノ說一句モナクシテ文言傳ハ乾坤二卦ノ說ノミナレバ、疑ラクハコレ繫辭傳內ヨリ乾坤二卦ニカ、リタル說ヲヌキ出シ、別ニ

文言傳ト號シタルナルベシ。……序卦、雜卦、說卦ノ文ノゴトキハ古ナリト雖モ疑フベキコト多シ。コレハ前世易ニ長ゼシ人ノ傳ヲ作リタルヲ、聖人ノ彖爻象辭ニ合セテ十翼ト名ケタルナラン。

易ノ卦ハ上ニ云フ如ク、文王ノトキマデハ卦爻ノ象ヲ觀テ吉凶ヲ決スルナリ、是レ伏羲の易ナリ。ダンダン用ヒ來リテマギラハシクナリテ、人ノ勝手ヅクニ吉凶ヲ決シテ易道ニ違フコト多シ、コヽニ於テ文王彖ヲカケ周公又爻ノ辭ヲカクルナリ。スベテ疑ハシキコトアリテ進退窮マリタルトキトシテ心志ヲ決ス、疑ハシキコトナク進退四六步ナラバ、六ヲ用ヒ四ヲステ心志ヲ決シトスルニ及バズ。後世ニテハ彖象ノ辭ヲハジメ十翼悉ク備ハリテ、又程先生ノ傳、朱先生ノ本義アレバ、唯ツネニ吾身ノ今日ノ有樣ヲ考ヘ、何卦何爻ニアタルト定メテ、其爻ノ言ヲトリ用ユベシ、コレ易ヲ學ブノ要也。

これだけが大體易に關する記事の重なる點だと思ひます。

此の蟠桃の考へから見ますと、易は最初占筮の爲めに發明されたもので、筮竹の數によつて卦を畫し、この卦の形によつて吉凶を判斷したもので、これが所謂伏羲の易であるが、後に文王が彖辭をかけ周公が爻辭を作られて卦爻の辭が備はると、それは判斷の模範を示す書物と成つて、最初占筮だけの目的に使はれたものと意味がかはつて來る、さうして最後に十翼が作られて、十翼を通じて卦爻辭を見ると、それは社會に於ける總ての場合と總ての地位とに應ずべき道德の規範を示した教訓書となる。これが蟠桃の易に對する大體の意見であります。蟠桃は斯の如く易に三段の進化を考へて居りまするが、こゝが蟠桃の優れて居るところであると私は考へます。

蟠桃の考へによりますと易が道德の經與と解せられるのは十翼を通して見るからでありますが、この十翼もまた一人の人が作つたものでなく、種々な人の手に成つて居りまするから、十翼相互の間にも見解の相違が

あります。昔から十翼は孔子の作られたものだと傳へて居ますが、それは色々な點に於て疑問があります、始めてこの疑問を提出したのは宋の歐陽修でありまして、歐陽修は「周易童子問」といふ書物をかいて十翼は孔子の作であるまひと疑つて居り、日本の學者でも伊藤仁齋先生などは矢張り歐陽修の役をうけて十翼を孔子の作でないと考へて居られます、さうして蟠桃も亦これを孔子の作とは考へないで、部分部分によつて作者も違ひ、製作年代も違つて居るものと見て居ります。「夢の代」には彖傳のことについては一言もいつて居りませぬが、象傳はこれを大象傳と小象傳とに分けて「大象傳ヲ作ル人ハ誰ナルヲ知ラザレドモ、スグレタル文ニテ孔子ヨリ前ノ書ナリ、古ハヒトヘニ象ト云フ、小象傳之ニック」といつて居ります。斯ういふ考へは蟠桃自身の發明ではなくして、恐らく竹山履軒兩先生から得たものであらうと思ひます、竹山先生の易に關する著作は出版に成つて居りませぬから參考できませぬが、履軒先生の著書は「周易逢原」が出版されて居ます、これによりますと、履軒先生は象を大象と小象とに區別せられて、更に小象と彖傳とを類似のものに見て、十翼の內大象が尤も古く小象と彖傳とがこれにつぎ、繫辭傳は更に後のものだと論ぜられてゐます。蟠桃の說も恐らく履軒先生を襲つたもので、大象を最も古く、小象と彖傳とを略は同じ時代のもので、大象よりは後に出來たものと考へたのでありませう。さうして大象を尤も古く見ることは少し疑問がありますが、象傳を大象と小象とに分ち、大象を引きはなして小象と彖傳とを連絡させようとする見解は非常な卓見だと考へます。それは象傳は大體爻辭の說明でありまして韻文でありますが、その初の部分は一卦の象を說いて爻辭に關係なく且散文であります、例へば

經文	象傳
乾元亨利貞	天行健君子以自强不息

初九、潛龍勿用、　　潛龍勿用陽在下也
九二、見龍在田、利見大人、　　見龍在田德施普也
九三、君子終日乾々、夕惕若厲无咎　　終日乾々反復道也
九四、或躍在淵、无咎、　　或躍在淵進无咎也
九五、飛龍在天、利見大人　　飛龍在天大人造也
上九、元龍在悔　　元龍有悔盈不可久也
用九、見羣龍无首吉　　用九天德不可爲首也

に於て象傳の最初の一行は一卦の象を說明して散文であるが、第二行以下は上の爻辭を說明して句末に韻をふんで居ます、この散文の部分が履軒先生や蟠桃翁の所謂大象で、有韵の部分が即ち小象であります、さうして大象と小象とは散文と韵文と文の形式を異にして、その內容も前者は卦象を說いて後者は爻辭を說明して居ます、これ大象と小象とが形式から見ても內容から見ても違つて居ることを示すものであります。之に對して彖傳は彖辭の註釋說明でありまして、その內容は小象と全く別でありますが、其形式は矢張り韵文で小象に似て居ます、乃て彖辭と小象とは形式が同じで前者は卦辭を說明し後者は爻辭を說明しますから、これだけで完全に卦爻辭即ち易の經文が說明されて居る譯であります。さうして既に彖辭と小象があれば大象はなくてもすむのであるから、小象から大象を離して獨立に考へ、彖傳と小象を合せて同じ性質のものと見ることが、頗る合理的であると思はれます。

次ぎに繫辭傳につきまして蟠桃は「繫辭傳ハ博ク易ヲ設ケテ云ヒツクスト雖モ、乾坤二卦ノ說一句モナクシテ、文言傳ハ乾坤二卦ノ說ノミナレバ、疑フラクハコレ繫辭傳內ヨリ乾坤二卦ニカヽリタル說ヲヌキ出シ

別ニ文言傳ト號シタルナルベシ」と言つて繫辭傳と文言傳とを略ぼ同じものと考へて居ります。尤も「夢の代」の中には、繫辭傳の文章は非常にいゝが、文言傳の文章はやゝ劣る、この點から見れば一人の作でないか知れぬと二の足をふんでは居ますが、まづ大體に於て同じものであらうと見て居る樣であります。

さて文言傳は乾坤二卦の象辭の說明でありますが、乾の卦の說明の所をよく讀んでみますと、乾の卦をずつと一遍說明して、又初に戻つて說明し、それが終るとまた初に戻つて都合四回繰返して同じ爻辭を說明して居ります。そこで第一、第二、第三と分けて考察致しますと、二と三とは韵文で、一と四とは散文になつて居りまして、その說明も多少相違して居ます。これ等の點に注意して考へますと同じ文言傳の中でも所によつて筆者が違ふと思はれます。さうして繫辭の中に「亢龍有悔」といふ句を說明して、

子曰貴而无位、高而无民、賢人在下位而无輔、是心動而有悔也

といつて居りますが、此の說明は文言傳の第一の解釋散文の部分に一辭も違へずに出て居ます、從つて現に繫辭傳にはなくても文言の散文の部分は繫辭傳と同じ材料から出て居ることが想像されます。乃で繫辭傳と文言傳は同じ時代の者であらうといふ、蟠桃の考へが大體あたつてゐる樣に思はれます。

それから最後の說卦、序卦、雜卦といふ三つの篇は、蟠桃の考へでは可なり古い文章であるけれども、それは本當の卜筮易者の方に傳はつて居た易で、儒家の易と關係ないと考へて居るやうであります。

それで易の初は卦の形だけで判斷する、それが占筮の時代で、それが一歩進んで彖象辭といふものがかけられると占筮判斷のお手本となります、それが今度は彖傳象傳によつて說明されると、道德的の經典になる。さうして說卦、序卦、雜卦といふものは、大象あたりで判斷した時代の、易の專門家が傳へた所の文獻であらう。蟠桃は先づ斯ういふ風に區別を立てゝ見て居るのであります。

そこで私も大體さういふ風に見て易を研究することが穩當であらうと考へます。從つてこの立場から易傳の道德思想といふことを申しますと、彖象傳の道德思想と、繫辭、文言の道德思想といふ二つの區劃を立てゝ考へられると思ひます。最初は彖象の道德思想でありまして一々彖傳、象傳の文句を引いて申上げるといゝのでありますが、それは非常に時間もかゝりまして厄介でありますから、極く大體を申しますと、彖傳の一番初めに、

大哉乾元、萬物資始、乃統天、雲行雨施、品物流形、……乾道變化、各正性命、保合大和、乃利貞、

至哉坤元、萬物資生、乃天承天、坤厚載物、德合无疆、含弘光大、品物咸亨、……柔順利貞、君子攸行、

といふ節があります。之によると彖傳の作者は易の根本は乾坤の二元で、此の二元が基礎になつて易が出來て居る、乾元は天の德であつて、坤元が地の德である、前者は萬物を生成し、後者は乾元の德に從つて生成の事業を完成するものであると、斯ういふやうに考へて居ります。それから彖象傳全體を通讀致しますと、乾の德といふものは剛健を表はし、坤の德は柔順を表はして居るやうであります。言換へれば、剛と柔との二つの反對を基礎にして、總てを說明して居ります。所が此の彖象傳の中に、どうしたらよいとか惡いとかいふ判斷を示す場合を注意して見ますと、いつもいゝと判斷される時には、剛と柔の中を得たときであります。淸朝の學者で錢大昕といふ人がありまして、其の人の文集に「潛研堂集」といふ文集がありますがその中に次の樣な言葉があります。

彖傳中言中者三十三、象傳中言中者三十、其言中也、曰正中、曰柔中、曰剛柔非中也、而得中者无咎、故嘗謂易六十四卦三百八十爻、一言以蔽之、中而而已、

これは彖傳と象傳から見ると、易の道德は剛と柔との二つの反對の中を取るといふことが標準になつて居る

といふのでありましてよく彖象傳の精神をつかんだものと思はれます。

所が繫辭傳や文言傳になりますと、彖傳、象傳で剛柔といつた言ひ方が變りまして、陰陽といふ言葉が出て居ります。尤も彖象傳にも陰陽といふ語がないでもありません、繫辭傳、文言傳にも剛柔の說がないでもありませんが、大體彖象傳の剛柔を繫辭傳では陰陽といふ言葉で表はして居ります。乃で繫辭傳の中の有名な言葉を引きますと、

一陰一陽之謂道、繼之者善也、成之者性也。

といつて居りますが、此に一陰一陽之謂道といつた意味は、恐らく宇宙自然の道といふものは、陰陽の消長變化で行はれて居るといふ意で、繼之者善也といふのは、この自然の法則に從つていくのが善であるといふ意でありませう。從つて人間の道德はこの一陰一陽ある自然の道に隨順する以外に何ものもない筈でありますから、この道を知ることが尤も大切な事となります。然らば人間の道をどうして知るかといふと、人間には生れ落ちて以來、先天的に一陰一陽の道が備はつて居る、其の備はつて居る道は即ち人間の本性でありまして此の本性に基いて行動することがやがて人間道德が完成されることになると觀て居るのであります。此の意味を又繫辭傳の中には

成性存存道義之門

といふ言葉で言ひ現して居ります。これは自分の本性を完成してゆくといふことが、軈て人間の道德であるといふ意味を言つて居るのであります。ところがそれが文言傳になりますと、

閑邪存誠

といふ言葉で言ひ現されて居ります。閑邪存誠といふのは、自分を僞らずに邪を防ぐこと、之れが人間の道

だと說明して居るのであります。前ち彖象傳では剛柔の中を得ることを中正の道として尊ぶが、繫辭文言では誠を存すること、換言すれば自ら省みて僞らないことを中正の道と考へて居る樣であります。一體中の字は色々な意味に解釋される字でありまして、兩端の中央といふ意にもなりますが、又外に對する中即內の意味にも使はれます、さうして內の義は更に一轉して人間の中心即忠の義にも使はれます。彖象傳に剛柔の中と說いたのは剛柔といふ兩極端の中央を意味しまするが、繫辭文言に誠を存することを力說して居りますのは忠誠を尊ぶ意味でありますが、この忠誠は彖象傳の中の意味が轉化したのだと思はれます。乃て易傳の道德思想を一言で申し述べますると中といふ一字に盡きると言はれます、即ち彖象傳では剛柔の中正を得ることを易の道だと說くが繫辭文言では陰陽の消長を宇宙の道と考へてこの消長の理を誠即忠によつて直覺することを人間の道德と解して居るのであります。

此處まで話して參りますと自然「中庸」が聯想されて參ります。易傳の道德は初めは中で後には誠になつて居りますが、中庸篇の中にもやはり中といふことゝ、誠といふことが說かれて居ります。それは易と中庸といふものがどういふ關係にあるかといふことを、暗示して居るものと思ひます。此の中庸も現在は四書の一となつて居りますけれども、もとは禮記の中の一篇で、禮記の中にある中庸は漢の鄭玄が注を書いて居りまして、鄭玄の注の內に中庸の文章が前後錯亂して居るといつて順序を直したところがありますが、宋の朱子は又更に大きな訂正を加へて居ります。然し鄭玄や朱子が未だ氣付なかつた一つの錯簡が殘つて居ます、それは朱子の校訂本の第十六章に、鬼神を論じて居る部分でありまして、此章は現在のまゝでは前後の意義が續きません、恐らくこれは第二十四章の次にまはるべきだろうと思はれます。此第十六章を錯簡と見るのは私の考ではなくして懷德堂の先儒の說でありまして蟠桃の夢の代にも說明されて居ります。

鬼神ノ章十六章ニアルハ錯簡ナリ。此書首尾連續スル事至リテ正シ。然ルニ此章上下ニツラナラズ。ユエニ朱子費隱ヨリシテサマ〳〵ニトキナスト雖、穩ナラズ。仁齋先生コノ章ヲ以テ、上受ル所ナク下起ス所ナシト始メテ疑ヲ入ルト雖、其說ヲ得ズ。萬年三宅先生ノ卓見ニテ、此章ヲ二十四章ニスレバ、前後ヨリ連續ストアリショリ五井、中井ノ二先生コレヲトナヘテ、今ノ竹山、履軒ノ兩先生ニイタリテソノ說備ハル。右鬼神ノ章ヲノゾケバ十五章ノ「父母其順也乎」ヲリ十七章ノ「舜其大孝也與」ヘウツリテ、ダン〳〵武王、周公ノ孝ニウツル。コレニヨリ二十四章ハ二十三章トナル。「至誠如神」(二十三章末句)ヨリ十六章ヲコノ處ヘ入レテ「鬼神爲德其盛也乎」ヘウツリ、末ノ「誠三不可揜如此乎」ヨリ二十五章「誠自成也、道自道也」トウクレバ、始終本末ガソナハリテ又遺憾ナシ云々(夢の代三八四)

蟠桃の說明はこれだけでありますが、これは誠に穩當な考へであると考へます。履軒先生の「中庸逢原」の中にも十六章を二十四章に移して居りますが、此の說明が少しも出て居りませんので人の注意を惹きませんが、私はこれは非常に卓見であると思ひます。

さて右の樣に錯簡を正しまして中庸全體を通覽致しますと朱子本で第二章より第十九章までは專ら中といふことを說いて、第二十章以下は中といふことからはなれて、誠といふことを專ら說いて居ります。もし十六章が現在の位置にあれば十六章にも誠がとかれて居る譯であるがそれが二十四章にまはると誠を說いたのは二十章以下に限られます。それから中を說いた所と誠を說いた所を比較致しますと、中を說いた所は言葉が簡潔でありまして論語に似て居りますが、第二十章以下になるとずつと言葉が延びて、禮記、易傳に似て居ります。それで初めの中を說いた所と、後の誠を說いた所とは、作者が違ふではないかと思はれます。從來は中庸に子思が作つたものとなつて居りますが、私は子思の作つたのは初の中を說いた部分だけであつて、

誠を說いた所はもつと後のものでないかと思ひます。

然らば後はどの邊まで下るかといふと、大體考へはつくと思ひます。そこは現在中庸の誠を說いた所に

今天下車同軌、書同文、行同倫、

といふ文句がありまして、此文章がかゝれた當時支那全土にわたつて車の轍の幅が統一されて居り、文字が統一されて居て、道德の標準も同じであつたことが明言されて居りますが、後漢の許愼といふ學者が作つた說文といふ書物の序文によると、戰國の頃は七國相爭つて國々が田疇畛を異にし、車塗軌を異にし律法令を異にし、衣冠制を異にし、言語聲を異にし、文字形を異にして少しも統一がなかつたので始皇帝が天下を統一するに及んで李斯の献策に從つてこれが統一をはかつたといふことが、かゝれて居ります、さうして秦の始皇帝は天下を巡狩して所々で碑を立て自れ功業を勒して居りますが、芝罘の刻石や琅邪臺の刻石にはやはり「器械一量、同書文字」といふ文句があつて度量衡や文字の統一をはかつたことが始皇の功績として記されて居ます、これは說文の序文の記事が確實であることを實證するものでありまして戰國以後秦の統一まで車軌を同じうし書文を同じくしたことは全くなかつたのであります。從つて中庸の中に「今天下車同軌、書同文」とあるのは中庸の此等の部分が秦の時にかゝれて居ることを示すものであります。但「行同倫」といふ一句は虐政を縱にした始皇の時代には適中しない樣にも感ぜられませうが、始皇が吳越の方面を巡狩して立てた會稽山の碑には、當時此地方の風俗は男女關係が非常に亂れて居たので始皇が嚴命を下して男女の道德を中國と同じくせしめたとかいて居りますから、始皇にも「行同倫」といふ善政があつたことはたしかで、これも秦代に適當する語であります。そこで此等の句を含む中庸の誠を說いた部分は秦代の述作だと考へられます。この中庸の下半を秦代の述作と見ることは私一個の私見でなくして淸末の大儒俞曲園の「湖樓筆談」

の中に「中庸蓋秦書也」といふ一節があつて詳らに考證されて居ます、但俞曲園はこれ等の句に本いて中庸全體を秦書に考へたが、私は中庸を上下二つに分けて、下半分だけを秦書と考へた點が違つて居ります。即ち私の考へでは中庸は上下に分つて考へるべきもので、上の方は子思の作か、よし子思の作でなくても、子思に近い時代の記錄であらうが、下の半分は秦の時代に入つてから、子思學派の後學が上半の思想を敷演して作つたもので、中庸の古い部分では中を過不及なき兩端の中央と見て居ますが、後半では中は忠即ち誠の意味に說明されて居ると思ふのであります。さうして斯う考へますと中庸の思想の發展が易傳の思想の發達と竝行してゐる樣に感ぜられます。そこで少し武斷のそしりはありませうが、私は易の彖象傳は中庸の上半とは同じ思想で、恐らくは子思學派の人によつて作られたもの、又繫辭文言は中庸の下半と同じ思想でこれも亦更に後れた時代に恐らくは秦の頃の子思學派の人の手に成つたものであらうと考へます。かつて西村先生が御存命の頃、先生が私に向つて易傳の一部は恐らく子思の作だらうと話されたことを記憶しますが、その後色々讀書をしつゝ考へますと、清朝の初に李光地といふ學者があつて、此人は勅命をうけて周易折中を編纂した人でありますが、此人が又「中庸餘論」といふ本をかいて、易の哲學によつて中庸を說明してゐますそれから清朝の末に魏源といふ學者があつて、「庸易通義」といふ論をかいて居ますが、その中には易と中庸との言葉の類似思想の類似點を並べて居ります。さうして此等の先輩の研究を綜合して考察を進めますと、易と中庸との關係が如何に深くあるかを悟ることができます。さうしてこれによつて從來の作者と製作年代の全然判らないとされてゐた易傳が、何時頃如何なる學派の學者によつてかゝれたかを髣髴することができると思ひます。今一度くりかへして申しますと、易の彖象傳の道德は唯中の一字で、中庸上半の思想と似て居る、恐らく彖象傳は子思學派の人の手に成つたものであらう。次に繫辭文言の道德說は誠の一字を出ない

これも亦中庸後の思想と同じである、恐らく繫辭文言は秦の頃に於ける子思後學の手に成つたものであらうさうして易が道德的に見られるのは、此等の傳を通じて見るからであるから、易が儒家の經典として尊ばれる樣に成つたのも、子思學派の間から始まつたことであらう。

今日私が御話申上げたいと思つたことはこれだけでありますが、猶一つ附加へておき度いことがありますそれは秦の始皇帝といふ人は詩書を燒いたり儒者を坑にしたりして、恐ろしく儒教を迫害した君主であるのに、どうして易の文言や中庸後半の樣な深遠な思想がこの時代に起り得たかといふ疑問であります。想像しまするに孔夫子歿後道家墨家を始めとして色々變つた思想が起り、これ等の異端は絕ねず儒發に影響して儒家の方でも追々哲學的に進んで來たらしいのでありますが、突然始皇の迫害に遭つて免るべき途を考へた揚句、唯一のにげ道を考へついたものと思はれます、それは詩書を始め天下の書は盡く燒棄を命ぜられましたが、たゞ易だけは卜筮の書といふ名目の下に燒棄を免れましたので、この易によつて儒教の精神を宣傳しようと考へた結果が、繫辭や文言の生れる所以でないかと考へます。甚だ下手な話を永々と申し述べまして、さぞ御聽苦しかつたことゝ存じますが、それにもかゝわらず御淸聽を賜つたことを感謝いたします。（終り）